

不都合な加筆：アルベルチーヌの墓標をどこに建てるか

中野，知律
一橋大学大学院社会学研究科：教授

<https://doi.org/10.15017/4355451>

出版情報：Stella. 39, pp.67-92, 2020-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

不都合な加筆

——アルベルチーヌの墓標をどこに建てるか——

中 野 知 律

「消え去ったアルベルチーヌ、先立つ小説 (roman) 囚われの女の続きがここに始まる」とプルーストの自筆で余白に記されたタイプ原稿が1986年、作家の姪の遺産整理の際に発見され、その孫ナタリー・モーリヤックによる校訂版が翌1987年に出てから¹⁾、このタイプ原稿上にはしか見出せない題名のもとに編まれるべきテキストとはどのようなものでありうるのかをめぐって多くの議論が交わされてきた。1925年の初版以来²⁾、真正さが確認できる最終稿の不在によって、校訂版ごとに巻名が入れ替わり、巻末の切れ目にも疑念が残ってきた現行の『失われた時を求めて』第6篇。その編み直しの手がかりとなることが期待された作家の遺稿となる修正タイプ原稿はしかしながら、この篇のありよう、さらにはプルースト小説の最後の変容可能性について、逆に重大な論争を引き起こしたのである。この篇をめぐるかつての議論に些か関わってきた者として³⁾、件のタイプ原稿の存在が公にされてから今日に至るまでにフランスで刊行されたこの篇の主要校訂版、さらに日本では2019年末に完了した吉川一義による全訳『失われた時を求めて』のなかの当該篇の邦訳版をふまえ、この死後刊行テキストの宿す複雑な問題系をあらためて精察する責任を自覚している。本稿はそうした立場からプルーストの最終修正を再検証する試みの端緒となるものである。

オリジナル修正タイプ原稿をめぐって

1986年のタイプ原稿(以下、D1)の発見で明らかになったのは、それ以前にフランス国立図書館に収められ、小説第6篇の初版が扱っていたタイプ原稿(以下、D2)が、オリジナル修正タイプ原稿(D1)の不完全な写しであったということである。D2は、清書カイエに基づいて2部作成されたタイプ原稿のうち未使用のまま残されたものの上に、D1に施されたプルーストによる修正⁴⁾を

校訂者が取捨選択して書き写し、清書カイエで補ったものだったのだ（D2の余白には初版校訂に関わった作家の弟ロベール・プルーストとジャック・リヴィエールが参照した清書カイエの該当頁数が鉛筆で記入されている）。清書カイエとの照合による補正が必要であったのは、死を前にして取り掛かった修正作業が D1 全体に行き届いているとは到底みなし得ない状態だったからである。

タゴールの仏訳『逃げ去る女』が新フランス評論から出版されたことで、同じ題名は諦めねばならないと考えている、とプルーストは 1922 年夏以降ガリマルに告げていたわけだが、それに代わるものとして作家が自筆で記した篇タイトル *Albertine disparue* が認められるのは D1 においてだけである。

プルーストが D1 の余白に記した「N.B.」によれば、『消え去ったアルベルチヌ』は 2 章編成である。648 とタイプで打たれた頁の余白に「アルベルチヌ第 1 章の終わり」と記し⁵⁾、続く 250 頁を「すべて外して」第 2 章に「飛ぶ」ことを指示するプルースト自筆のメモと、ヴェネチアから戻る汽車の場면을以って「消え去ったアルベルチヌの終わり」とするという註記によって、清書カイエを起こしたタイプ原稿の 3 分の 2 近くが外された。初版校訂者たちは D1 の削除部分を埋め戻し、1918 年 11 月 30 日刷了の『花咲く乙女たちの蔭』に掲載された続篇予告に倣って 4 章編成で D2 を整えている。

プルースト研究界と多くの読者に衝撃を与えたのは、専ら D1 上の「削除」であった。実際、D1 そのものを底本としたもの⁶⁾を除き、1987 年以降の校訂版のすべてが、何らかの形で D1 からの「削除」部分を補っている。修正タイプ原稿から取り除かれた頁には、後続篇と繋がる部分や、残された頁と対をなす挿話の一部が含まれていたからである。

それに対して「加筆」の方は、作家が遺した自筆修正タイプ原稿をめぐるいわゆる「アルベルチヌ論争」においてほとんど関心をひかなかったと言ってよい。加筆の作家のイメージが定着したプルーストの本質は最も豊かな（少なくとも量的に）テキストに現れるという暗黙の了解を傷つかなかったからであろう。

しかしながら、疑念の対象にならなかった「加筆」が、D1 発見以降の校訂者たちによってすべてそのまま本文として受け入れられたわけでもないのである。しかも本文への採録が躊躇われている加筆は「消え去ったアルベルチヌ第 1 章」に現れるものであって、「消え去ったアルベルチヌ第 2 章」の加筆の

方はどの版でも基本的に本文に活かされている。

実のところ、この「第1章」の加筆への校訂者たちのとまどいこそが、オリジナル修正タイプ原稿 D1の問題の核心にあるのだ。そしてまさに今、この問題は日本のプルースト読者にとっても重要な意味をもつと思われる。2018年5月に刊行された岩波文庫版の吉川一義訳は、D1にプルーストが記したタイトル「消え去ったアルベルチヌ」を小説第6篇の題名として採用する一方で、「消え去ったアルベルチヌ第1章」が含むすべての自筆加筆修正を本文にも註にも採っていないのである。

この判断がきわめてラディカルであると言えるのは、この翻訳版が「主たる底本」にしたとされるリュック・フレスによる校訂版（2009年の「リーヴル・ド・ポッシュ」版）をはじめ、1986年のD1発見後にフランスで刊行されたものとして参照されている『消え去ったアルベルチヌ』の篇題を持つエディションのいずれもが、D1上の「消え去ったアルベルチヌ第1章」の加筆を註もしくは本文に採録しているからである⁷⁾。

まずは検討の対象を「消え去ったアルベルチヌ第1章」の加筆に絞ろう。

吉川翻訳版がD1上の「消え去ったアルベルチヌ第1章」の加筆の存在に註においてさえも触れなかったのは、清書カイエを主たる底本にしたAD-LF2009に拠っていることにあるのだろう。ただし、AD-LF2009版がD1「消え去ったアルベルチヌ第1章」上の「加筆」を一部「本文」に、それ以外を「註」に振り分けて採り入れているのに対し、吉川翻訳版は、リュック・フレスが「註」に回した「加筆」をいっさい採用しないだけでなく、「本文」に入れた「加筆」(AD-LF2009, p. 35, pp. 56-57)についても、翻訳では採らないことを明記している(「LF版との異同一覧」5-6頁)。それはAD-LF2009版以上に清書カイエへの準拠を厳密にした処置とも言えようが、リュック・フレスがD1の「消え去ったアルベルチヌ第2章」から「本文」に採り入れている長大な「加筆」(AD-LF2009, pp. 326-329 および pp. 331-337)は、吉川翻訳版もAD-LF2009版に倣って「本文」に採録しているのである。つまり、D1の「消え去ったアルベルチヌ第2章」にある「加筆」は採用するが、「消え去ったアルベルチヌ第1章」の「加筆」のほうはすべて排除したことになる。

一方、「本文」には入れなかったD1「消え去ったアルベルチヌ第1章」上の「加筆」をすべて「註」に採ることを選んだ校訂者たち(プレイヤッド版も、リュック・フレスのもうひとつの校訂版LaF-LF2017も、AD-LF2009版と同じ「加筆」

の採録の仕方をしている)は、異文を網羅するという原則を自らに課したというだけのことなのか。それとも、註に回した D1 の加筆修正をもし「本文」に入れたなら、この篇の読み方が質的に変わる可能性を認識したからだろうか。確認しておかねばならないのは、たとえ作家が最後に手を入れたこのタイプ原稿が *Albertine disparue* と呼ばれる篇の「抜粋」のために作成されたものであったとしても(その疑念はブルースト研究者から未だ消えてはいない)、D1 上の修正の効果が抜粋元のテキスト本体にまったく及ばずにいたとは考えにくいということである。

「註」に載せておく必要はあるが「本文」には採録できないと判断された「加筆」。そうする理由を校訂者たちは明確に述べていないのだが、実は、1987 年以降の校訂版の対処の仕方は、遡ってみれば、1925 年のこの篇の初版が採った方策の延長上にあることがわかる。初版校訂者は、D1「消え去ったアルベルチーナ第一章」上の「加筆」のうち、1987 年以降の校訂者たちが「本文」に入れたのと同じものを「本文」に採っており (AD1925, p. 7, pp. 32-33), それ以外の「加筆」は、「註」として付す代わりに(初版は「註」を持たない)、黙殺していたのである。この不都合な「加筆」とはどのようなものなのだろう。

アルベルチーナはどこで死ぬべきか

D1 の「消え去ったアルベルチーナ第 1 章」に散在するブルースト自筆の加筆修正には、前篇『囚われの女』のタイプ原稿に加筆された挿話に対応する一節(散歩の際にふたりで立ち寄った「菓子店の女主人」のもとにアルベルチーナが身を寄せているはずだという「確信」)、「自我の死」についての「私」の思索を語るテキストなどもあるが、ここで注目したいのは、逃げ去った女の死に場所に関わるものである。その核となる加筆 2 点をまず見てみよう――

① ボンタン夫人からの電報文 (D1, p. 632 の余白に書き込まれたブルースト自筆の加筆修正)

アルベルチーナはもはやおりません。[...] あの娘は、~~<ヴィヴオンヌ川のほとりで>~~
[自筆で加筆のち削除] <ヴィヴオンヌ川のほとりでしていた [自筆加筆]> 散歩の途中で馬から投げ出され、木にぶつかったのです。私たちは手を尽くしましたが、あの娘を生き返らせることはできませんでした。

Elle a été jetée par son cheval contre un arbre ~~<au bord de la Vivonne>~~ pen-

dant une promenade <qu'elle faisait au bord de la Vivonne>⁸⁾

D1の公開以前には『失われた時を求めて』の読者の誰も知らなかった「ヴィヴォンヌ川のほとりで」のアルベルチヌの死。というのも、1925年の初版『消え去ったアルベルチヌ』の校訂者たちはこのD1の加筆をD2に写しとっていなかったからである[NAF16748, f° 107 r°, paginé 632]。初版には従って載らなかったこの加筆を、D1を知った1987年以降の校訂版 AD-LF2009, LaF-LF2017, Pléiade1994も「本文」には採らずに「註」に回している。

恋人の死の知らせに衝撃を受けた主人公は「未知の苦悩」に突き落とされて眩く——「彼女が出て行ったときでさえ、私がひとりぼっちになっていたときでさえ、私はなおも彼女を抱きしめて口づけしていたのだった。彼女がトウーレーヌ [削除] <旅行に> [行間へのプルースト自筆の加筆] 行ってからもそうし続けていたのだ」[D1, p. 633]。さらに、逃げ去った女の本性について、以下のとおり、「閃き」にも似たある確信を「私」は抱くのである——

② ゴモラの真実を示す符牒 (D1, p. 633 余白のプルースト自筆の加筆)

<「ヴィヴォンヌ川のほとりで」というこの言葉は、私の絶望に何かしら恐ろしいものを付け加えるのだった。というのも、自分はヴァントウイユ嬢の友である、と軽便鉄道のなかで彼女が私に告げたことと、彼女が身を置いていた私のもとを去って以来身を置いていた<いた>場所、そして彼女が死んだ場所がモンジュールヴァンの近くであったこと的一致、この一致は偶然のものではあり得なかったからであり、鉄道のなかで語られたあのモンジュールヴァンと、ボンタン夫人の電報のなかで無意志的に告げられたあのヴィヴォンヌ川との間に、一条の閃光が走っていたのである。私がヴェルデュラン邸にいった晩、私が彼女に別れたいと言った晩に、彼女はまさしく嘘をついていたことになるのだ！>

<Ces mots : «au bord de la Vivonne», ajoutaient quelque chose de plus atroce à mon désespoir. Car cette coïncidence qu'elle m'eût dit dans le petit train qu'elle était amie de Mlle Vinteuil, et que l'endroit où elle se trouvait <était> depuis qu'elle m'avait quitté hélas se trouvait et et où elle avait trouvé la mort fût le voisinage de Montjouvain, cette coïncidence ne pouvait peut-être fortuite, un éclair jaillissait entre ce Montjouvain raconté dans le chemin de fer et cette Vivonne involontairement avouée dans le télégramme de Mme Bontemps. Et c'était donc le soir où j'étais allé chez les Verdurin, le soir où je lui avais dit vouloir la quitter, qu'elle m'avait menti !>⁹⁾

ブルーストの自筆で記されたこの長文の加筆も、初版校訂者が D2 に写そうとした形跡はない [NAF16748, f° 108 r°, paginé 633]。そして、初版にはないこの加筆も、AD-LF2009, LaF-LF2017, Pléiade1994 では「本文」には採られず「註」に回されているのである。

修正の連動

清書カイエにおいてアルベルチヌの最期の地とされていたのは、出奔後に彼女が身を寄せていた伯母の住居の近く、「トゥーレーヌ」である¹⁰⁾。この叔母のいる場所そのものが、しかし、D1 上の修正によってぎこちなく動き始めていたのである（「トゥーレーヌ」に換えて、あるいはその名を残したまま、「ベルギー」「ブリュッセル」の名が書き込まれる）。さらに、叔母の住む地とともにヒロインの逃亡先の候補地が新たな修正を受けている。もともと「パリ、アムステルダム」と並んでタイプに打たれていた「モンジューヴァン」が「トリエステ、バルベック」に書き換えられているのである¹¹⁾。これは、D1 に加筆されたアルベルチヌの死の場所の変更と明らかに連動して修正されたものだろう。行き先の予想を裏切る地名が電撃的な驚きをもって「私」に突きつけられるためである。

実のところ、この加筆修正の連動は後でも見るように決して整ってはいないのだが、まずはアルベルチヌの逃亡先（の可能性）と死に場所とが互いに避け合う動きを D1 の 2 つの修正箇所を確認してみよう。書き換えの焦点となっている地名は「モンジューヴァン」と「トゥーレーヌ」である――

清書カイエ C-XII, 28 r° をタイプに起こした部分への加筆修正 (D1, p. 551)

私がひたすら願ったのは、アルベルチヌがトゥーレーヌの叔母の家に発ったのであればということだった。そこでなら、結局のところ彼女は十分に監視されているだろうし、私が連れ戻すまで大したこともできないだろう。私が最も恐れたのは、彼女がパリに留まっているか、アムステルダムもしくはモンジューヴァンに発ってしまったことだった、つまり、私には気づき得ない下準備が整えられているような何らかの情事の企てに身を捧げるために逃げ出した、ということだったのだ。しかし実際には、パリ、アムステルダム、~~モンジューヴァン~~ <トリエステ、バルベック> といったいくつかの場所をつぶやきながら、私が考えていたのは可能性でしかない場所だった。したがって、アルベルチヌは~~トゥーレーヌ~~ <ベルギー> [加筆後に削除] に [sic] <叔母の家に> お立ちになりましたと管理人が答えたときに、それまで私が望んでい

るつもりだったその住まいがどこよりも忌まわしく思えたのは、それが現実のものであったからである […]

Tout mon espoir était qu'Albertine fût partie en Touraine, chez sa tante où en somme elle était jusqu'à ce que je l'en ramenasse. Ma pire crainte avait été qu'elle fût restée à Paris, partie à Amsterdam ou Montjouvain, c'est-à-dire qu'elle se fût échappée pour se consacrer à quelque intrigue dont les préliminaires m'avaient échappé. Mais en réalité, en me disant Paris, Amsterdam, ~~Montjouvain~~, <Trieste, Balbec,> c'est-à-dire plusieurs lieux qui n'étaient que possibles ; aussi quand le concierge d'Albertine répondit qu'elle était partie pour ~~la Touraine~~ <Belgique> <chez sa tante> cette résidence que je croyais désirer me sembla la plus affreuse de toutes, parce que celle-là était réelle, [...] ¹²⁾

興味深いことに、初版校訂者たちは、先に見た D1 上のヒロインの死に場所についての加筆を採らない判断をしたために、逃亡先についての D1 上のこの加筆を D2 に写しかけて、中止するという反応を示している。すなわち、インクで「モンジューヴァン」の名が削除され「トゥーレーヌ」と「バルベック」が加筆された後、その変更が鉛筆で消され、再び「モンジューヴァン」が加筆されているのである。さらに、インクで「トゥーレーヌへ」が消され「叔母の家に」が加筆された後に、鉛筆でそれが消されて改めて「トゥーレーヌに」に書き戻されている——

D2 (NAF16748), 26 r° (paginé 551) :

Mais en réalité, en me disant Paris, Amsterdam, ~~Montjouvain~~, [barré en encre] <Trieste, Balbec,> [ajouté en encre, puis barré en crayon] <Montjouvain> [ajouté en crayon] c'est-à-dire plusieurs lieux qui n'étaient que possibles ; aussi<,>[ajouté en crayon] quand le concierge d'Albertine répondit qu'elle était partie pour ~~la Touraine~~ [barré en encre] <chez sa tante> [ajouté en encre puis barré en crayon] <en Touraine> [ajouté en crayon] <,>[crayonné] cette résidence que je croyais désirer me sembla la plus affreuse de toutes, parce que celle-là était réelle, [...]

初版はこのかたちで（修正前のタイプ原稿のまま、すなわちそれが拠っている清書カイエのテキストで）「本文」を確定したわけだが、同じ「本文」を AD-LF2009, LaF-LF2017, Pléiade1994 も踏襲し、D1 上のこの修正は「註」に回している——

清書カイエ C-XII, 31 r° をタイプに起こした部分への加筆修正 (D1, p. 558)

サン＝ルーはすぐにトゥーレーヌ [消去] <ボンタン氏がフランス大使を務めている

ブリュッセル> [加筆] に行くことを承知した。[…] 彼はシャテルロー [消去] <ブリュッセル> [加筆] へ下って行く [消去] <下って行く> [加筆修正] ことになった。

Saint-Loup [...] consentit à partir aussitôt pour la Touraine <Bruxelles où M. Bontemps était ministre de France>. Je lui soumis la combinaison suivante. Il devait descendre <descendre> à Châtelleraut, <Bruxelles>, se faire indiquer la maison de Mme Bontemps, attendre qu'Albertine fût sortie, [...] ¹³⁾

これに対しても初版校訂者たちは D2 上で「トゥーレーヌに」に鉛筆で×を付け、余白に鉛筆書きで「ブリュッセル, etc.」と D1 の加筆修正を写しかけながら、止めている——

D2 (NAF 16748), 34 r° (paginé 558) :

Saint-Loup [...] consentit à partir aussitôt pour × la Touraine <Bruxelles, etc.> [ajouté en crayon et barré]. Je lui soumis la combinaison suivante. Il devait descendre à Châtelleraut, se faire indiquer la maison de Mme Bontemps, attendre qu'Albertine fût sortie, [...]

この処置も、やはり AD-LF2009, LaF-LF2017, Pléiade1994 に受け継がれて「本文」は同じかたちになり、プルーストの自筆修正は「註」に付されている。

1925年の初版校訂者たちはかくして D1 上のプルースト自筆の加筆修正を却下した——いったん考慮したうえで退けたにせよ（ヒロインの逃亡先）、考慮した痕跡も残さずに無かったことにしたにせよ（死に場所）。後世にも影を落としているそうした判断は何によるのだろうか。

加筆修正の射程

たしかに D1 にはこれまでに見た加筆との間に齟齬をきたす語句が残されている。例えば、上述の逃亡先についての加筆修正 [D1, p. 558] では、同じひとつの断章に含まれている2つのモンジューヴァンの名前のうちひとつしか「トリエステ, バルベック」に修正されておらず、もうひとつはそのまま残されていたりする。

また、「トゥーレーヌ」については、その地でのアルベルチーヌの死を語っていた清書カイエの一文 [C-XII, 79 r°] がそのままタイプに起こされていて、修正を受けずに残されている [D1, p. 635] ¹⁴⁾。

さらに、伯母の居所を「トゥーレーヌ」から引き離して「ベルギー」「ブ

リュッセル」に移そうとする動きが読み取れる加筆修正においても «en Touraine, chez sa tante» という語句が残されているし [D1, p. 551], D1, p. 558 の加筆修正よりも後のページでは、一箇所を除き——アルベルチーナの新たな死に場所を告げる2つの加筆の間にある一文 [D1, p. 633] の他は——「トゥーレーヌ」の名が修正されていないのである¹⁵⁾。

結果として、「私」の家を出た後アルベルチーナが「トゥーレーヌ」の伯母の家に身を寄せた時期があり、そこにサン＝ルーを派遣する、という物語の筋書きは破綻することなく D1 上で保たれることになるし、さらに「ヴィヴォンヌ川のほとりで」の彼女の死がいっそうの意外性を帯びることになるわけだ。

ならば、修正作業が完遂されていないプルーストのテキストにありがちなこうした不整合のほうにむしろ註をつけて読みの混乱を避けることも十分に可能であったはずである。にもかかわらず、語句レベルの齟齬よりも、ある程度の長さを持った加筆のほうを校訂者たちが問題視してきたのは、アルベルチーナの死の場所をめぐる加筆がもたらすものの重大さ、すなわち、それがこの篇の存りかたにとどまらず、後に続く小説末部全体の見通しをも射程に入れうるものであることに気づいたからではなかろうか。

それは、修正タイプ原稿 D1 のこの「加筆」が、清書カイエで展開されていた物語部分と内容的に幾分噛み合わぬのではないか、という危惧かもしれない。例えば、ヒロインの「モンジューヴァンでの死」が強く印象づけられた後に、トゥーレーヌもしくはニースでのアルベルチーナの素行調査のテキストが長く続くことへの違和感などである。しかも、そうした清書カイエでの展開はまさしく、D1 上の修正によって削除された頁に入っているものなのである。

「削除」修正を避けるために「加筆」修正の存在を初版校訂者は葬り去ったのか。結果として同じく「本文」から問題の「加筆」を落とした後世の校訂者たちの判断も、その延長上にあるものと理解してよいのだろうか。「加筆」を犠牲にすることによって、この篇のあるべき姿は護られたのか。試されているのは私たち自身のプルースト観なのである。

こうしてみると、この加筆の問題を検討するにあたっては3つの視点が考えられよう。

第1は、D1 上の「加筆」が「削除」と連動して——D1 の修正すべてがある方向性を以って——逃げ去ったアルベルチーナの物語の締め括りかたを変え

ようとするものなのかどうかを検証することである。D1上の「加筆」と「削除」の関係の必然性の有無を、校訂作業の面からではなく、テキスト読解の視点から検証する試みは未だ十分に行われていない。

第2の検証は、逃げ去るアルベルチヌの物語が、生成段階のそれぞれ異なる複数の死後刊行篇、すなわち変更の可能性が残るテキストのひとつであるという事実に基づくものである。タイプ原稿の作り直しとその修正まで進んでいた前篇『囚われの女』、手書き清書カイエへの加筆段階にとどまった続篇『見出された時』の間であって、『消え去ったアルベルチヌ』は、「清書カイエ」のなかで連続して読みうる形を一旦とっていたテキストを起こした「タイプ原稿」上で始まった修正のなかに姿を現そうとするテキスト、異なるエクリチュールの段差を垣間見せているテキストにほかならない。まとめられかけていた旧世界が変容し始めながら収束しきれず、誕生しきれなかった新世界に向き合わねばならない困惑と躊躇いを振り払うには、D1への修正すべてをこの篇の生成過程のなかに置き直して検討する必要がある。筆者が別の場で検証してきたこともこの視点からのものであったが、ここでは繰り返さない。

以下で新たに試みるのは第3の視点からの考察、加筆テキストそのものが持つ意味についてである。逃げ去る女が行き着いた「ヴィヴォンヌ川のほとり」と「モンジューヴァン」、この2つの名の背景に広がるテーマ系を確認し、そこにプルースト小説最大のヒロインの最期の姿を留める意味を考えてみたい。

コンプラーへの回帰

『消え去ったアルベルチヌ』の題名が記された唯一のタイプ原稿に加筆されながら、その篇題をとる多くの校訂版において本文から外された、ヒロインの死に場所としての「ヴィヴォンヌ川のほとりで」と「モンジューヴァン」。校訂者を怯ませるこの2つの固有名がそろって明確に指向しているものとは、特権的瞬間によって開かれた回想の物語の起点および同性愛のテーマの原点をなしていた地コンプラーへの回帰である。

小説の円環構造は極めて複雑な生成過程を宿しているのだが、以下では2つの点から考察を試みよう。まず、囚われの / 逃げ去るアルベルチヌの物語の執筆が開始される以前に《コンプラーへの回帰》のテーマを担っていた2つの物語系統——ジルバルトとサン＝ルーの結婚、ピュトビュス夫人の小間使いと

の恋——との関係に照らして。次いで、物語をコンブレーに送り返す2つの地名の相関関係についてである。

(1) 「タンソンヴィル」の新しい相貌

清書カイエのなかで、小説第1篇の舞台が物語に再び登場するのは、主人公のタンソンヴィル滞在においてである。『消え去ったアルベルチヌ』の初版校訂者が1919年の続巻予告¹⁶⁾に因んで「第4章 ロベール・ド・サン＝ルーの新しい相貌」と命名した部分、遡って1913年に予告された続巻プランでは「ロベール・ド・サン＝ルーの結婚」と題されていた章¹⁷⁾の発展形ともみなしうるテキストにおいて、コンブレーについての主人公の「幼年期の想念はすべて覆される」[C-XV, 71 r°]。散歩の「2つの方」は「遠く離れ、互いに知り合えず交流がない、封をされた甕のなかに閉じ込めてある」[I, 133] ような地ではなく、渡り歩いて行けるほど地理的に近いことや、「《冥府》の入り口と同じくこの世にはあり得ないものとして思い描いていたヴィヴオンヌ川の水溜り」はみすぼらしい「洗濯場」のような水溜りでしかないこと等々を、「私」はタンソンヴィル訪問で知るのである。

「2つの方」の結合は、スワンの娘とゲルマンの貴公子との結婚によって象徴的に実現される。1910年末～1911年のカイエでは、ヴェネチア旅行からパリに戻った後、夕食時に、母親からヴェネチアを発つ前に「ホテルのドア・ボーイから受け取ったまま忘れていた手紙」を渡されて、主人公は「モンタルジ[サン＝ルーの前身]とフォルシュヴィル嬢すなわちスワンの娘との結婚」を知ることになる[C-50, 34 r°]¹⁸⁾。1916-1917年にまとめられた清書カイエでは、サン＝ルーとジルベルトとの「結婚」を手紙で知るのヴェネチアからの帰りの汽車のなかで、そのあと家に帰っても話題にされ続けるかたちになっている[C-XV, 14 r°, 17 r°-18 r°, 46 r°-50 r°]。「サン＝ルー夫妻が暮らすタンソンヴィル」への訪問はその後日談となり、コンブレー世界の再認識と再構築が小説の大団円を準備することになるのである。

モンタルジ/サン＝ルーの結婚のように、囚われの/逃げ去るヒロインの物語の誕生以前にもともと構想されていたモチーフや挿話が、アルベルチヌとの恋の終焉の語りにもどのように嵌め込まれていったかについては、吉田城の詳細な研究が明らかにするところである¹⁹⁾。そうした成り立ち、すなわちアルベ

ルチーナ物語として書かれたテキストと、それとは異質な出自を持つテキストとの混成というありようは、この死後刊行篇のいたるところで問題を発生させており、そのひとつの表れを「タンソンヴィル」の挿話の位置づけ——現行の校訂版すべてで『消え去ったアルベルチーナ』の末部と『見出された時』の冒頭部に跨って置かれている——に見ることもできよう²⁰⁾。(実際、清書カイエにはこの篇をどこで終えるかについての明確な指示はなく、C-XV, 68 r^oにもともと続いていた頁が線で全行消され、挿入された紙片に書き直された断章のなかの2つの文の間に«.~.»という印が残されているのみである)。

小説の生成上の旧層において重要な契機を成していた「2つの方」の結合に先立って、アルベルチーナとの恋の終局に《コンブレーへの回帰》が託されることにはどのような意味がありえたのだろうか。「サン＝ルーの新しい相貌」、ソドムの男の顔が明らかになるタンソンヴィルの物語を、モンジューヴァン近くでの死によってゴモラの顔を露わにしたアルベルチーナの物語で裏打ちして、同性愛のテーマをいっそう複雑に語っていくということか——結婚する同性愛者の両性愛バイセクシャルの問題だけでなく、同性愛者たちの複雑な交錯としての「ソドムとゴモラの《結合》」²¹⁾の物語として。そうした新たな展開のうちに、D1から削除されたアルベルチーナの過去をめぐる探索や回想が、これまでとは違う照明のもとに読み直されていくことになったとしても不思議ではあるまい。

「タンソンヴィル」を、コンブレーの「2つの方」の結び目に位置づけて「私」の世界観が一新される場にするだけでなく、ソドムの愛とゴモラの愛で二重に染めあげられ始めた新たなコンブレー像を繰り出す舞台にすること。そのコンブレー世界からは、すでにテオドールが、そしてL・D・メゼグリーズを名乗るルグランダンも同性愛者の「本性」を頭にしながら慌ただしく飛び出して来ている²²⁾。加筆修正のための断章を書きつけたカイエのなかには、取り込まれるに至らなかった同性愛のテーマの展開を担うモチーフが幾つも残されているのである²³⁾。

このコンブレーへの早さすぎる回帰の意味は、アルベルチーナの死についての「加筆」を、「タンソンヴィル」のD1からの「削除」と結びつけて考える可能性にも関わってくる。「タンソンヴィル」の新たな相貌のもとでの再生である。実際、D1の修正は『消え去ったアルベルチーナ』の終おえ方かたを語っているに過ぎないのであって、そこから括り出されたもののその後の存りかたを縛るもの

ではないのである。

作家の死によって書かれることのなかった *après-texte* の影については、逃げ去った女の物語を一旦締め括った後でさらに同性愛のテーマを「ソドムとゴモラ続巻」として開拓していく構想をプルーストが口にしていたという事実を確認するにとどめよう。

囚われの / 逃げ去るアルベルチヌの物語をひとつの篇『ソドムとゴモラIII』とするか、2つの篇『ソドムとゴモラIII』『ソドムとゴモラIV』とするかについて、作家は曖昧な言葉を繰り返して続けた。

1921年10月20日付のガリマール宛書簡では「ソドムとゴモラIIIの最後」は「アルベルチヌの死、忘却」となると語り²⁴⁾、1922年1月18日には同じくガリマールに宛てて「ソドムとゴモラIIIはかなり短いもの (un Sodome III assez court)」で「2部 (deux parties)」から成ると告げる一方で [Corr., XXI, 39]、1922年6月25日には「題名としては、『ソドムとゴモラIII』のほうは『囚われの女』、『ソドムとゴモラIV』は『逃げ去る女』とつけたらどうかと考えるようになっていきます」と述べもする [Corr., XXI, 310-311]。

1922年秋、プルーストが死の10日ほど前にガリマールに届けた『囚われの女』の修正タイプ原稿に自筆で記されていたタイトルが『囚われの女 (ソドムとゴモラIII第1部)』であったことから²⁵⁾、逃げ去ったアルベルチヌの物語は『ソドムとゴモラIII第2部』に当たるものとその時点で考えられていたことがわかるのであるが、興味深いのは、11月18日の作家の死後まもなく『フランス書誌』が載せた『失われた時を求めて』の続巻情報である。そこには『ソドムとゴモラIII 囚われの女 消え去ったアルベルチヌ』と最終巻『見出された時』の間に「『ソドムとゴモラ』数巻 (続き)」が予告されているのだ。同じ内容は『新フランス評論』誌1922年12月1日号の「折り込み広告 (encart publicitaire)」でも伝えられている²⁶⁾ ——

Sous presse :

Sodome et Gomorrhe, III. La Prisonnière

Albertine disparue

À paraître :

Sodome et Gomorrhe en plusieurs volumes (suite)

Le Temps retrouvé (fin).

GF OEUVRES DE MARCEL PROUST

PASTICHES ET MÉLANGES. 1 vol. in-18.. .. 8.50

A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU

I. DU COTÉ DE CHEZ SWANN. 2 volumes in-16.
Chacun 5 fr.

II. A L'OMBRE DES JEUNES FILLES EN FLEURS.
(PRIX GONCOURT 1919). 2 vol. in-16, chacun .. 6.25

III. LE COTÉ DE GUERMANTES, I. 1 vol. in-16. 10 fr.

IV. LE COTÉ DE GUERMANTES, II) 1 vol. in-16.
SODOME ET GOMORRHE, I (Prix .. 12.50

V. SODOME ET GOMORRHE, II. 3 volumes in-16.
Chacun 6.75

SOUS PRESSE :

SODOME ET GOMORRHE, III. *LA PRISONNIÈRE*
ALBERTINE DISPARUE

A PARAÎTRE :

SODOME ET GOMORRHE en plusieurs volumes (suite)

LE TEMPS RETROUVÉ (fin)

LES PLAISIRS ET LES JOURS. 1 volume

MORCEAUX CHOISIS. 1 volume

GF ACHETEZ CHEZ VOTRE LIBRAIRE

これは1922年1月18日付のガリマール宛書簡のなかで「ソドム〔ソドムとゴモラの略〕II, ソドムIII, ソドムIVの予告（それに、ソドムVIとは言わないまでもソドムVはありそうに思います）」についてプルーストが述べていたこと〔*Corr.* XXI, 39〕と呼応するのであろうか。囚われの／逃げ去る女のタイプ原稿作成が開始される直前のものと思われるこの言の有効期限をどのように見積もるべきなのか。作家の命が尽きるまで続いていたエクリチュールの痕跡が、私たちに残された不都合な「加筆」であるとしたら、その存在に向き合うことによってこそプルースト世界の造山運動を感じ取れるのだらう。

（2）ヴェネチア旅行での恋の終焉

小説構想の早い段階で《コンブレーへの回帰》のテーマを担っていたもうひとりの登場人物は「ピュトピュス男爵夫人の小間使い」である。モンタルジ（サン＝ルーの前身）から噂を聞いていたこの妖艶な娘に会うために、彼女が向かったヴェネチアへと「私」も旅立つのだが、パドヴァで逢引を果たしたものの〔C-50, 2r^o〕、主人公の情熱はその後は続かない。この小間使いをめぐる挿話は、1913年に3巻構成で構想されていた小説の最終巻「パドヴァの悪徳と美德」と題された章に当てられていたもので²⁷⁾、娘との愛欲の場面は「アリーナの礼拝堂」（サン＝スクロヴェーニ礼拝堂）において「ジョットのあの美德と悪徳（ces Vertus et ces Vices de Giotto）を見るという欲望」〔C-50, 5r^o〕と重ねて語られる。

1910-1911年のカイエ50では、「ジョットの寓意画」の「複製」〔7r^o/9r^o〕は、「コンブレーで私が長年／毎日目にし」〔5r^o/4v^o〕、「パンソンヴィルの鐘塔を眺めながらアイリス香の漂う小部屋で快樂を味わう〔自慰に耽る〕ときに」通る「コンブレーの書齋」〔11r^o〕にあったものである²⁸⁾。ついに実物のフレスコ画を目にしながらか主人公は、「＜慈愛 la Charité＞像」〔7r^o〕を思わせる小間使いの娘が「コンブレーの出身」（C-50, 13r^o）、より正確には「コンブレーの近くのパンソンヴィルの生まれで、16歳までそこで暮らしていた」ことを知り〔9r^o〕、コンブレーの「薬屋の店員で教会の聖歌隊員でもあったテオドール」が彼女の義兄であることも判明するのである〔13r^o〕。

1909年の先行テキストでは、「ピクピュス（後のピュトピュス）夫人の小間使い」を主人公はヴェネチアまで追うことができず、パリで逢引が実現される

のだが、そこで交わした会話のなかで娘は自らの故郷について次のように語っていた――

ユール＝エ＝ロワールのゲルマントのお城のこと？〔…〕私はすぐ近くの出なの、私が育った田舎<村>はね、ゲルマントのお城から10キロのところにあるのよ。〔…〕メゼグリーズってたぶんお聞きになったことあるでしょ、そのすぐそば、~~イサエ~~ <ブルー>なのよ。[C-36, 4 r^o]

「コンブレー地方 (pays de Combray)」[C-36, 4 v^o; IV, 712]の「ゲルマントのすぐ近く」かつ「メゼグリーズのすぐ傍」の生まれの娘。彼女の説明は、「2つの方」が近接するコンブレーの地理を示唆するものとして興味深いが、さらに「コンブレーの近くの旦那さんに墮落させられた (un monsieur d'auprès Combray [...] m'avait débauchée)」[C-36, 4 r^o-5 r^o]と告白する彼女は、まさに「悪徳の寓意」を象る女であった。

パドヴァとコンブレーの間を幾重にも行き交う糸によって織りなされる「小間使い」との恋は、1913年のアルベルチヌ登場以降は物語の背景に沈んでしまい、他の女たちとの恋と同様、絶対的なヒロインとの恋に吸収されてしまう。そしてパドヴァへの訪れも、アルベルチヌ亡き後のヴェネチア旅行においては付随的な挿話に留まって²⁹⁾、「悪徳と美德」のモチーフは小説第1篇のコンブレーの下働きの女中の姿のうちに収まってしまふのである³⁰⁾。

ヴェネチアへの旅の夢と絡みあう愛欲の物語の古層のヒロイン「ピュトピュス夫人の小間使い」を介して浮かびあがることになっていた《コンブレーへの回帰》のテーマをアルベルチヌが引き継ぐことになった際に、前景に現れてくるのが「悪徳」としての同性愛のテーマであったのだろう。それは、《コンブレーへの回帰》を語ってきたもうひとつの挿話「タンソンヴィル」が、同性愛のテーマに深く彩られることになったのと呼応するかのようにも思われるのである。

「モンジューヴァン」と「ヴィヴォンヌ川のほとり」

プルースト小説の同性愛のテーマの原点をなす「モンジューヴァン」。「コンブレーの傍の (auprès de Combray)」[I, 111]この地にある音楽家ヴァントゥイユの邸で、父親の死後その娘が女ともだちと同性愛に耽る場面を「私」は目撃したのだった。

ところで、D1の加筆のなかの「ヴィヴォンヌ川のほとりとモンジューヴァンの間に閃光がほとばしり」、2つの地名の絆を語り手が躊躇いなく認知するというくだりはそれ自体、2つの方の結合をすでに示唆しているのだろうか。というのも、コンブレーでの「2つの方」の散歩のうち、メゼグリーズの方は「平原の眺めの理想」であり、ゲルマントの方は「川の風景の典型」であって [I, 133], 「モンジューヴァン」「ヴィヴォンヌ川」はそれぞれの「方」に位置づけられていたことが思い出されるからである（「メゼグリーズの方のモンジューヴァン (du côté de Méséglise, à Montjouvain)」 [I, 145], 「ゲルマントの方の最大の魅力はヴィヴォンヌ川の流れがほとんどずっと傍にあることだった (il y avait presque tout le temps à côté de soi le cours de la Vivonne)」 [I, 164]）。

実のところ、物語舞台の構想の初期には、野原と川辺という2つの散歩道の属性の配分が曖昧であったことが確認されている³¹⁾。1909年春のカイエ4では「ロワール川 (le Loir) と道が離れていく」岐路、つまりヴィヴォンヌ川のモデルとなる川と接する地点に「スワン氏の庭」は在ったし、ゲルマントの方の前身「ヴィルボンの方」で「さんざし」の情景が見られたりスワン嬢が現れたりするように、「2つの方」の対称性が曖昧であった時期があるということである。

D1の加筆は、アルベルチヌの死にまつわる「モンジューヴァン」と「ヴィヴォンヌ川のほとり」という地名をただ並べてコンブレーを指向させるだけでなく、この2つの地名どうしを関連づけ重ね合わせて、コンブレーの原初のイメージ造形、「野原」と「水辺」が未分化の地勢を浮かび上がらせようとしているのだろうか。

コンブレーの散歩のシンメトリーが確立され (カイエ12) 2つの「方」が分化していく過程で、「モンジューヴァン」が特殊な位置を占めていることに和田章男は注目している³²⁾。ヴァントゥイユの前身ヴァントンが住む「ラ・ルスリエール」(後のモンジューヴァン)は、1910年のカイエでもすでに「スワン家の方」にあるのだが [C-14, 12 r°], 興味深いのは、同じカイエのなかに書きつけられた執筆メモである――

メゼグリーズの方 (もしくはゲルマントの方) に置く諸法則のひとつを見出したとき、私は、自分の思索に心奪われたまま歩きながら、ラ・ルスリエールを見下ろす丘に着いていた [C-14, 11 v°]

やがて文学的思索は「ゲルマントの方」に、性愛の夢想は「メゼグリーズの方」へと振り分けられていくなか、「モンジューヴァンの沼のほとりで」[I, 153] 主人公が文学的な問いかけを体験する「秋の散歩」は、決定稿に至るまで「メゼグリーズの方」とどまるのだ——ゲルマントの方、「ヴィヴォンヌ川のほとりで」の「文学的関心 (préoccupations littéraires)」[I, 176] を秘かに内包しながら——

私がメゼグリーズの方に負っていることを数え上げてみると、私が思い出すのは、その秋、ある散歩のときに、モンジューヴァンを護るように覆っている茂みの土手のそばで、私たちの印象とその慣習的な表現との乖離に初めて気づいたことである。[I, 153]

モンジューヴァンは、愛欲と創造のテーマをとともに担う、2つの「方」の交差点なのである。モンジューヴァンで交わされていたヴァントウイユ嬢とその女ともだちのゴモラの愛が、音楽家の遺した傑作を世に送り出すのに決定的な貢献をすることになったように、悪徳の地に逃げ込んだアルベルチヌも、彼女への「私」の愛憎の日々を文学創造の絶対的なマチエールに変えるのか。

小説最大のヒロインの死をモンジューヴァンの名に結びつけることは、物語の「コンプレへの回帰」に、人生の創作への変換という美学的課題を重ねることでもあったのかもしれない。

私たちとしては、ここでさらに「モンジューヴァン」の地勢に目を留めてみよう。というのも、「モンジューヴァンの沼のほとりで」の文学的体験に「ヴィヴォンヌ川のほとりで」の文学的思索がまるで流れ込んだかのように、そして、野原の景色と水辺の景色をそれぞれ体現する「2つの方」が混線していた小説生成過程の古層の記憶のうちに、アルベルチヌというバルベックの海辺からバリのアパルトマンに移植された花咲く乙女、「水陸両生 (amphibie)」[III, 679] のヒロインが葬り去られていく、まさに「水」とのゆかりという点からこの土地の名を考えてみたいからである。

「悪徳」の地、沼になる

「モンジューヴァンのヴァントウイユ氏の家は、藪に覆われた小高い丘の下の方に (en contrebas d'un monticule buissonneux) あった」[I, 111]。それは「大きな沼のほとりの (au bord d'une grande mare), 藪に覆われた土手を背に

して立つ (adossée à un talus buissonneux) 家] [I, 145] で、その沼は「モンジュヴァンの沼 (la mare de Montjouvain)」[I, 153] と呼ばれている。

この土地の形状を、ヴァントゥイユの前身ヴァントンの地所 (「ラ・ルスリエール La Rousselière」, 「ラ・トピニエール La Taupinière」, 「ラ・コンブ La Combe」, 「モンジュヴァン」と名を変えていく)³³⁾ について見てみると微妙な描写の変化が確認できる。

1910年のカイエでラ・ルスリエールは、すでに決定稿と同じく「丘 (colline) の上から」見下ろされる位置にあって、そこには丘の「裏面を下りて」近づくようになっている (「j'étais arrivé à la colline qui domine la Rousselière <et j'en descendais le revers>» [C-14, 11 v^o])。同じカイエではヴァントン邸が「丘に浜で留められたような窪地のなかに (dans un fond, clouté contre une colline)」あり、「その丘の <藪に覆われた (buissonneux)> 裏面は家沿いに坂になって下っている」。その地所が「La Taupinière [もぐらの巣穴、もぐら塚] と呼ばれていたのはおそらく、ほとんど地下のような (souterrain) そのありようゆえであろう」という加筆もある [C-14, 8 r^o marge]。

上から見下ろされる「窪地」の地所で、「巣穴」のなかのモグラのように暮らすヴァントゥイユ、その邸の立地の描写には「裏目、不運 (revers)」の意を宿す「丘の裏面 (revers)」からのアプローチや、磔刑の「釘・鋸 (clou)」を思わせる «clouté» など、後ろめたさと懲罰を思わせる不穏な語彙が積まれている。

1911年のカイエでは、「一種の小さな谷 gorge のなかに埋め込まれた enfouie ようなヴァントン氏の小さな田舎家 [削除]」[C-68, 28 r^o]、「メゼグリーズの方の、ラ・コンブにある、一種の小さな谷のなかに埋め込まれたく土手を背にしているくほとんど目に見えないような [加筆のち削除]> [加筆]>家」[C-68, 30 r^o]の近くに「ひとつの池 (un étang)」が現れる [C-68, 35 r^o]。そして、あの「メゼグリーズの方へ」の「秋」の散歩での文学的体験が、この「池」のそばで起こるのだ。

天気が崩れそうな日に出かけることの多かった「メゼグリーズの方への散歩」で、雨上がりの陽の光が反射するのを「私」が見るのは、1909年のカイエでは「ヴィヴェット川 [ヴィヴェンヌ川の旧名] の水面」[C-26, 10 r^o -11 r^o, 11 v^o] であったが、1911年のカイエでは「池の底に (au fond d'un étang) 瓦屋根の反映をみとめて」深い印象に打たれることになる [C-68, 35 r^o]。

雨催いのなかの散歩というコンテクストにふさわしく、と言うべきか、まるでメゼグリーズの方で降る雨が「窪地」に水溜まりを生じさせたかのように、タイプ原稿ではその「池」は「大きな沼 (une grande mare)」となり、その「ほとりに」住んでいたヴァントンの地所にちなんで「ラ・コンブの沼 (la mare de la Combe)」と命名される³⁴⁾。後の「モンジューヴァン」の名はかくして水を含むものとなったのである。

ヴィヴォンヌ川のモデルである Le Loir とその支流は、現実の地図にあるイリエだけでなくモンジューヴァン Montjouvin (小説の Montjouvain のモデルか) をも潤しているのだが、コンブレーの夢想の地図のなかの「モンジューヴァンの沼」が果たしてヴィヴォンヌ川の水脈に繋がるものであったのかどうか、小説テキストは何も語っていない。「ヴィヴォンヌ川のほとりで」のアルベルチヌの死と、彼女がゴモラの女たちと最期に共にしたであろう「モンジューヴァンの沼のほとりで」の愛欲の生。D1 の加筆に現れた2つの水辺の名の「遭遇 (coïncidence)」を必然に変える力はさらに、ヒロインの前世にも潜んでいたのではなかったか。

「水辺」に死す

『失われた時を求めて』最大のヒロインの造形に寄与することになる多くの女たちのなかに、アルベルチヌの直接の前身として、同性愛の影をまとったオランダ娘マリアが存在していたことは、モーリス・バルデッシュ、アンリ・ボネ、石木隆治の研究が明らかにしている通りである³⁵⁾。

『見出された時』のカイエ 57 (1911 年初め) では、アムステルダムの「ヘーレングラハト運河のほとりに (au bord de l'Herregracht)」[70 r°] あったマリアの「親戚」[69 r°, 73 r°] もしくは「保護者 (tuteur)」[73 r°] の「小さな家」[70 r°] を訪れることを夢見た時期があったことを、小説のフィナーレの場となるゲルマント大公妃邸で「私」が思い出している。「マリアと一緒に、<秋に> [...], ヘーレングラハト運河のほとりを <ある秋の朝> 枯葉の積もった岸に太陽があたるなか、下に向かって歩いていく」夢 [72 r° barré], 「その夢のために人生の残りすべてを犠牲にしてもよいと思っていた時期」[72 r° marge] の「ある秋、マリアは叔母の家に (chez sa tante) 出発して行ったのだった」[72 r° marge barré]。メゼグリーズの方へ向かった「ある秋の日」に「モンジューヴァンの

沼のほとりで」文学的啓示を受ける場面と、伯母の家へ身を寄せた逃げ去る女のモチーフが重なりながら透かし見える一節である。

アルベルチヌスのオランダでの過去は清書カイエではごく小さなものに留まってしまうのだが [III, 887, 894], バルベックの海辺に佇む乙女の姿にせよ、バリの室内でかつての背景であった海の魅力を身の内に湛えて眠る女の姿にせよ、さらにまたヴェネチアの「大運河の紺青 (l'azur du Grand Canal)」に染め上げたようなフォルチュニーの衣装を纏って主人公の旅の夢を誘う囚われの女の姿にせよ、アルベルチヌスには水のテーマがついてまわる。

その死と水辺との関係について言えば、『ソドムとゴモラII』(1922年刊)の2度目のバルベック滞在において、誰かとの密会を隠しているのではないかと問い詰める恋人をはぐらかそうとしてアルベルチヌスは興味深い言葉を口にしていた——「海が私のお墓になるのでしょうかね。[...] 溺れてしまうのよ、海に身を投げて」。「まるでサポートだね」とそれを受ける主人公 [III, 197]。「海で溺れて死ぬ」とは、飛行機事故でニースの海に沈んだアゴスチネリを彷彿とさせるものだろう。

この会話を含む一節は『ソドムとゴモラII』のタイプ原稿(1921年)に付された長大なパプロール上に加筆されたものである³⁶⁾。ヒロインの死に場所として「ニース」が考えられていたカイエのメモ(1915-1916年)³⁷⁾、そして「トゥーレーヌ」での死に言及している先述の清書カイエ C-XII の一文(1916-1917年)を経て³⁸⁾、迷いながらも、「ニース」の名を遠ざけることで実人生との接点を作家が避けようとする方向が確認できる一方で、それとは逆行する「水死」への執着が『ソドムとゴモラII』への加筆に認められることには注目してよからう。

死後刊行となった『見出された時』の清書カイエには、アルベルチヌスの「水死」が別のかたちで回想されている。アルベルチヌスの「最期の姿 (l'image ultime)」すなわち、その死は「川のなかで (dans la rivière)」のものであったと語り手が回想しているのである——

サン＝ルーの人生とアルベルチヌスの人生、私が知り合ったのは随分遅くなってから、ふたりともバルベックにおいてであったが、あんなにも早く終わってしまった彼らの人生はほとんど交差することはなかった。それでいて、そう、彼サン＝ルーだった、と私は気づいていたのだった、歳月の敏捷な桴が、初めはまったく別々のものに思われていた私の回想の糸の間に、幾つもの糸を織り込んでいくのを眺めながら、ア

ルベルチーヌが私のもとを去ったときボンタン夫人の家に行かせたのはまさに彼だったのだ、と。それに、ふたりの人生それぞれには、私が疑ってもみなかったパラレルな秘密があることがわかってきていたのだった。[...] もう死んでしまったふたり、結局のところ随分短い間隔で隔てられている彼らそれぞれの最期のイメージ、塹壕の前での最期の姿、川のなかでの最期の姿と、最初のイメージとを対比させて私は見ることができるのだった。最初のイメージは、アルベルチーヌの場合もそうだったのだが、海に沈む太陽のイメージと結びつくことによるのみ価値を持つものと私には思えたのである。[C-XVIII, 80 r°-81 r°; IV, 427]

「塹壕の前で」の死と「川のなかで」の死。サン＝ルー侯爵はたしかに「前線に戻った日の翌日、部下の退却を援護するために」[C-XVIII, 77 r°; IV, 425]「塹壕を攻撃しに行つて (en allant attaquer une tranchée)」[C-XVIII, 78 r°; IV, 426]戦死した。アルベルチーヌの「川のなかで」の「最期の姿」が同じく物語のなかで実現されていたとすれば、それはプレイヤッド版の註 [IV, 1248] が説く「地中海に」沈んだアゴスチネリの死からの着想であるよりも、むしろ D1 最終加筆修正との不思議な呼応を感じさせるものではなからうか。

1919年頃までにはかなりまとまっていた『見出された時』の清書カイエの表頁のなかにこの記述があるということは、何を意味するのだろうか。1922年秋のD1の加筆の方が、最終篇での「川のなかでの死」の回想との対応を意識したものであったということなのか。さらには「対比されたふたりの死」の背後に、ソドムの愛とゴモラの愛という「パラレルな秘密」をもつふたりの生がさらに交錯あるいは浸潤し、「私の回想の糸の間に幾つもの糸を歳月の敏捷な杼が織り込んでいく」ように、未だ語り尽くされていない新たな物語が紡ぎ出される可能性を、作家の死によって中断された修正作業は示唆しているのだろうか。

死後刊行となった篇をめぐって、こうした問いに対する答えを予想することに意味があるのではない。プルーストが最後に残した加筆の存在を認めることから、『失われた時を求めて』全体の新たな読みが可能になるのかどうかを問い始めることこそが重要なのである。プルースト世界は私たちを読み直しに誘うことを未だやめない。

註

- 1) Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu, Albertine disparue*, édition originale de la dernière version revue par l'auteur, établi par Nathalie MAURIAC

- DYER et Étienne WOLFF, Paris : Grasset, 1987 (以下 AD-NM1987 と略す).
- 2) Marcel PROUST, *Albertine disparue*, Paris : Éd. de la NRF, 2 vol., 1925 (以下 AD1925 と略す)。
 - 3) 以下の拙論を参照—— «De *La Fugitive* à *Albertine disparue* : le destin en éclipse de l'avant-dernier volume d'*À la recherche du temps perdu* — évolution du roman proustien après 1914 —», 2 vol., thèse de doctorat, Université de Paris IV, décembre 1989. 『『逃げ去る女』から『消え去ったアルベルチヌ』へ——『失われた時を求めて』の変貌の一側面 (上)』および『『逃げ去る女』の行方——『失われた時を求めて』の変貌の一側面 (下)』, 『仏語仏文学研究』, 東京大学仏語仏文学研究会, 第3号, 1989年6月, 37-60頁および第4号, 1990年5月, 79-103頁; «Le destin en éclipse de l'avant-dernier volume d'*À la recherche du temps perdu*», *Bulletin Marcel Proust*, Illiers-Combray : Société des amis de Marcel Proust et des amis de Combray [以下 BMP と略す], n° 40, 1990, pp. 108-116; 「アルベルチヌ論争——ブルーストの死後刊行部分におけるエディションの揺らぎについて」, 『一橋大学研究年報 人文科学研究』, 一橋大学研究年報編集委員会, 第33巻, 1996年1月, 223-264頁 (次年度号に図版の印刷ミスの訂正あり)。
 - 4) オリジナル修正タイプ原稿 D1 上の修正については以下を参照—— Nathalie MAURICAC DYER, *Proust inachevé*, Paris : Honoré Champion, 2005; *Robert Proust et la nouvelle revue française. Les années perdues de la Recherche 1922-1931*, avec la collaboration de Alain RIVIÈRE et Pierre-Edmond ROBERT, Paris : Gallimard, 1999.
 - 5) この自筆のメモに先立って口述筆記されたと思われるもうひとつの註記 (線で削除されている), 「消え去ったアルベルチヌの終わり, あるいはもしガリマル氏がもっと長い巻 (volume) をお望みなら消え去ったアルベルチヌ第1部 (la première partie) の終わり」は, 『消え去ったアルベルチヌ』と呼ぶべきものの核心は第一章にある, という意思表示とも取れる。
 - 6) AD-NM1987, 同じ校訂者による *Albertine disparue*, précédée de *La Prisonnière*, sous le titre de *Sodome et Gomorrhe III*, Paris : coll. «Le Livre de poche», 1993 (以下 AD-NM1993 と略す)。
 - 7) 吉川一義訳『失われた時を求めて 12 消え去ったアルベルチヌ』, 岩波文庫, 2018年, 「凡例」3-5頁; Marcel PROUST, *Albertine disparue*, introduite et annotée par Luc FRAISSE, Paris : coll. «Le Livre de Poche», 2009 (以下 AD-LF2009 と略す); Marcel PROUST, *Albertine disparue*, texte présenté, établi et annoté par Anne CHEVALIER CHEVALIER, dans *À la recherche du temps perdu*, sous la direction de Jean-Yves TADIÉ, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. IV, 1989; édition revue, 1994 (Pléiade1994 と略す。吉川一義が挙げている 2014年刷は未見。プレイヤッド版は 1994年に解題を修正した版を 1989年版として刊行, 2018年7月刊の版でも 1989年版の名のもと 1994年の修正版を踏襲している)。

以下、著者名と小説総題は省略—— *Albertine disparue*, édition présentée, établie et annotée par Anne CHEVALIER, nouvelle édition revue, Paris : Gallimard, coll. «Folio», 1989 et 1992 pour l'établissement du texte, 1990 et 1992 pour la préface et le dossier ; *Albertin disparue*, édition intégrale, texte établi, présenté et annoté par Jean MILLY, Paris : Honoré Champion, 1992 ; repris dans la coll. «GF», 2003 ; *La Fugitive*, édition critique par Luc FRAISSE, Paris : Classiques Garnier, 2017 (*LaF-LF2017* と略す。篇題は *La Fugitive* を採っているが D1 上の修正は註に採録されている) ; *La Fugitive. Cahiers d'Albertine disparue*, texte établi, présenté et annoté par Nathalie MAURIAC DYER, Paris : coll. : «Le Livre de poche», 1993 (これは副題にもある通り、タイプ原稿が作成される前の段階の手書き清書カイエに限定的に準拠した版なので、D1 上の修正は当然含まれない)。

以下 Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, 4 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1987-1989 et 1994 は *RTP* と略し、本文中での引用には巻数と頁数のみを記す。

- 8) *AD-NM1987*, p. 111. *AD-LF2009*, p. 112, note *b* ; p. 177, note 2. フランス国立図書館所蔵の「ブルースト資料体」については、慣例に倣い、註記では下書カイエと呼ばれるものの番号を「C-算用数字」、清書カイエは「C-ローマ数字」で表す。加筆部分は < > , 削除部分は抹消線で記載する。[] は筆者による補足説明。
- 9) *AD-NM1987*, pp. 111-112. *AD-LF2009*, p. 113, note *a*.
- 10) 「アルベルチヌの死が私の苦悩を消滅させることができるには、衝撃が彼女をトゥーレーヌで殺しただけではなく、私の内でもそうする必要があったろう」(C-XII, 79 r^o, ajout en interligne)。1914-1915年のカイエにはヒロインの最期の地についていくつかの案が記されていた (notre thèse précitée, t. I, pp. 48-55)。
- 11) アムステルダム、トリエステの名が挙がっているのは、そこでアルベルチヌが暮らした過去を持つことを「私」が知っているからであり (III, 290, 499, 887), 「彼女が放蕩に耽るのが眼に浮かぶ場所」(III, 894) であるからだ。清書カイエ以前に逃亡先として言及されていたその他の地名については、拙論「『逃げ去る女』から『囚われの女』へ」43-44頁参照。
- 12) *AD-NN1987*, p. 42. *AD-LF2009*, p. 52, note *a*, note *b*.
- 13) *AD-NN1987*, p. 49. *AD-LF2009*, p. 58, note *c*, note *d*.
- 14) *AD-MN1987*, p. 114. Jean Milly 版(1992年/2003年)の note 51 および *AD-NM1993*, p. 542 note も参照。
- 15) D1, pp. 586, 595, 611 («la gare d'Orsay»), 624, 630 ; *AD-MN1987*, pp. 73, 82, 95, 104, 109 ; Jean Milly 版, note 19 参照。
- 16) 1919年『花咲く乙女たちの蔭に』の刊行当時には5巻編成を予定していた『失われた時を求めて』の最終巻『ソドムとゴモラII-見出された時』のなかの一章に当たる。
- 17) 1913年『スワン家の方へ』の刊行時は3巻編成とされていた小説最終巻『見出された時』の最後から2章目に当たる。

- 18) C-50, 34 r° : «~~En arrivant à Paris~~ <Une fois a<A>rrivés à Paris et rentrés comme ma mère entraint dans la salle à manger pour dîner avec moi>, ma mère s'écria : "Dans la<'> ~~préci~~[pitation] agitation de ce départ j'ai complètement oublié que le portier de l'hôtel m'avait donné 2 lettres et il y en avait une pour toi." »
- 19) Voir Jo YOSHIDA, «Proust contre Ruskin : la genèse de deux voyages dans la *Recherche* d'après des brouillons inédits», 2 vol., thèse de doctorat présentée à Paris IV, 1978.
- 20) 『消え去ったアルベルチヌ』初版(1925年)の校訂者は、C-XV, 75 r° の後に白紙ページが残されているところ(75 r° に記されたブルーストによる註記「彼女〔ジルベルト〕の父親の死に対する残酷さ(それが書かれたカイエを写すこと)」に対応するためと思われる)を以て第6篇の終わりとした。タンソンヴィル滞在でのこの習得/啓示の場面(C-XV, 70 r°-71 r°)は、初版校訂者の判断に倣って、現行のプレイヤッド版(1989/1994年)、ジャン・ミイ版(1992/2003年)、ナタリー・モーリヤック版『逃げ去る女』(1993年)、リュック・フレス版『消え去ったアルベルチヌ』(2009年)と『逃げ去る女』(2017年)では第6篇に入れられているが、プレイヤッド旧版(1954年)と吉川翻訳版は第7篇『見出された時』に収録している。
- 21) 『新フランス評論』誌1921年6月1日号に掲載された論考「ボードレールについて」のなかでブルーストは、「レスボス」詩篇に認められる「ソドムとゴモラの《結合》」を「自作の終わりの方で」登場人物のひとりモレルにおいて描いた、と述べている。以下の論考を参照——吉川一義「ブルーストの謎」、『図書』、岩波書店、2020年4月、22-27頁、および沖田吉徳「『悪の華』とブルースト：「レスボス」から「ソドムとゴモラ」へ」『早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会 教養諸学研究』第147・148合併号、2020年5月、1-27頁。
- 22) Théodore と Legrandin との関係については C-XV, 83 r° marge-paprole で語られる。(この一節はすべての校訂版で『見出された時』の冒頭近くに入れられている。RTP, IV, 278-279)。テオドールが同性愛の男であることは、『囚われの女』のなかでシャルリュスが明かしていた(C-XI, 15 r°)。タンソンヴィル滞在先立つ一節では、メゼグリーズ伯爵を名乗るルグランダンについて、「コンプレー地方 pays de Combray を少しでも知っている」「新しい世代の若者たち」は「メゼグリーズの方とゲルマントの方が接していると聞いても驚くことはないだろう (ils aurait pu n'éprouver aucun étonnement : le côté de Méséglise et le côté de Guermantes se touchent)」[C-XV, 41 r°] と語られる。
- 23) Voir C-61 (1917-1919).
- 24) *Correspondance de Marcel Proust*, éditée et annotée par Philip KOLB, 21 vol., Paris : Plon, 1970-1993 [以下 *Corr.* と略し巻数と頁数のみ記す], XX, 500.
- 25) Troisième dactylographie (NAF16745), 1 r° : «La Prisonnière (I^{re} partie de Sodome et Gomorrhe III) ».

- 26) *Bibliographie de la France*, 24 novembre 1922, n° 47; Nathalie MAURIAC DYER, *Proust inachevé*, Paris: Honoré Champion, 2005, pp. 115-117; P.-E. ROBERT, «L'Édition des posthumes de *À la recherche du temps perdu*», *BMP*, n° 38, 1988, pp. 95-101; Nathalie MAURIAC DYER, «Les Mirages du double», *BMP*, 1990, n° 40, p. 143. なお、本稿 80 頁に掲載した画像は個人蔵のオリジナルに拠るもの。
- 27) Voir YOSHIDA, thèse précitée, t. I, pp. 102-108, pp. 178-186 et 200-206; t. II, pp. 168-207; 石木隆治『マルセル・ブルーストのオランダへの旅』, 青弓社, 1988 年, 150-165 頁および 307 頁; *RTP*, IV, 721-734.
- 28) Cf. «rentrant le soir dans le petit cabinet touchant la salle des Giotto j'en regardais le clocher [de Pinçonville]» (C-23, 7 r°; *RTP*, IV, 716).
- 29) Voir D I, pp. 922 <933bis> - 924 <933ter>. C-XIV, 116 r°
- 30) Voir YOSHIDA, thèse précitée, pp. 178-186, t. II, 123-124. C-5, 54 r° (fin 1908-1909), C-8, 54 v°-58 v° (1909), C-10, 41 r°-45 r° (1909), C-12, 96 r° (1909).
- 31) Voir Akio WADA, *La création romanesque de Proust: la genèse de «Combray»*, Paris: Honoré Champion, 2012, pp. 91-92; Claudine QUÉMAR, *Cahier Marcel Proust 7. Études proustiennes II*, Paris: Gallimard, 1975, pp. 159-282.
- 32) Voir WADA, *op. cit.*, pp. 128-138.
- 33) *Idem.*
- 34) Première dactylographie corrigée (NAF16730), f°s 221 r°, 229 r°, 235 r°
- 35) Voir Maurice BARDÈCHE, *Marcel Proust romancier*, 2 vol., Paris: Les Sept Couleurs, 1971, chapitres I et II; Henri BONNET, «Maria ou l'épisode hollandais», *BMP*, n° 28, 1978, pp. 602-613; 石木前掲書, 第 2 部。
- 36) NAF16739, f° 65 r° に貼付された紙片に加筆されたテキスト (一部に口述筆記を含む) のなかのブルースト自筆の文章。118 r° にはタイプで打ち直したヴェルシオンがあるが, 件の文章はいずれでも同じ。
- 37) «Quand je dis que certains noms (prendre des noms près de Balbec ou près de Nice, si c'est à Nice mais qu'elle est morte mais il vaudrait mieux qu'elle mourût ailleurs) me font mal, [...]» [C-56, 34 v°].
- 38) 前註 10 参照。